



馬 耳 東 風

先日の新聞紙面で、とある記事に目が止まった。かつて沖縄の果実農家を長年苦しめた外来種「ウリミバエ」を、沖縄県が中心となって30年以上かけて根絶したという話である。過去の成功事例ながら、科学と行政、そして現場の粘り強さが結実した象徴として、あらためて紹介されていた。

ウリミバエは、東南アジア原産の果実寄生性ハエで、ゴーヤやマンゴー、ピーマンなど多くの作物に産卵し、幼虫が果肉を食い荒らす。1970年代に沖縄で確認されて以来、農作物に甚大な被害を与え、生産農家にとっては長年の頭痛の種だった。この被害に対して、沖縄県が中心となって採用したのが「不妊虫放飼法（SIT）」という生物的防除法である。

SITとは、放射線で繁殖能力を奪ったオスのウリミバエを人工的に大量生産し、自然界に放つことで野生のメスと交尾させ、次世代の個体を生ませないようにするという技術だ。殺虫剤に頼らず、他の生物への影響を最小限に抑えつつ、個体群全体の縮小と絶滅を狙うこの方法は、時間と費用を要する一方で、環境にやさしく、長期的な効果が期待できる。持続可能な技術として国際的にも高く評価されている。

1993年には沖縄本島での根絶が達成され、さらに周辺離島でも着実に作業が進められ、2018年には与那国島での駆除が完了。国内からウリミバエはついに姿を消し、日本は“ウリミバエ根絶国”として、農業と環境保全の両面において大きな成果を挙げたのである。30年に及ぶ執念と科学の成果には、思わず拍手を送りたくなる。

ところが昨年、沖縄本島で新たな脅威が発見された。

「セグロウリミバエ」という別種の外来ハエが入り込んでいたのである。フィリピンや台湾を原産とするこのハエも果実に産卵し、収穫前の作物を台無しにする性質をもつ。生物学的には異なる種だが、果実の輸入や観光旅行などを通じて無意識に持ち込まれたと考えられており、沖縄県は早期対応の必要性を強く認識し、再びSITを含む防除体制の再構築に乗り出した。

このような外来生物の侵入や再定着との闘いは、私たち獣医師にとっても決して他人事ではない。獣医学の対象は、犬や猫、家畜といった飼育動物だけでなく、野生動物や生態系、さらには人間社会の公衆衛生にまで及んでいる。ウリミバエのような外来種の定着は、農業だけでなく生態系全体を攪乱し、時には新たな感染症リスクさえももたらす。

実際、SITの技術は現在、マラリアやデング熱を媒介する蚊の個体数抑制にも応用されつつあり、アフリカ諸国を中心に試験的な導入が進められている。媒介動物を科学的に制御することで感染症の拡大を未然に防ぐというこのアプローチは、人獣共通感染症への備えという点でも、今後ますます重要になってくるだろう。

科学は未来を変えるだけでなく、過去に培われた知恵と経験が、新たな危機に立ち向かう力にもなる。沖縄でのウリミバエ根絶の物語は、その好例である。そして獣医学もまた、人と自然が持続的に共生する社会を支える“知のインフラ”として、変化に適応しながら進化を続けていく必要があるだろう。

この記事を読みながら、筆者はあらためて獣医師としての責任と可能性を感じた。動物と向き合うその先に、人の暮らしと環境がある。科学の力と現場の知恵を重ねながら、未来に向けた一歩を私たちも積み重ねていきたい。

（も）